

宮崎県の生活綴方教師・木村寿 (七)

『文集『光』の終焉』

一、『光』の解散

『工程』第一巻第二号(昭和十年五月)には、『光』第二十三号を紹介した記事の中に、『光』もとうとうこの号で廃刊になるらしい。』とある。続いて第一巻第三号(昭和十年六月)には、木村寿の手で『光』の終焉を告げる『光』の解散』が書かれている。冒頭には、次のようにある。

『年を一つ重ねる度に、僕の教育熱心は、一所にとつしり落ち付いて、子供の全生活に没入し、教育の真実なる道を耕したいとねがふことが切である。』

前任校の延岡小学校で文集『草のめ』を出しながら、わずか一年で転勤になった木村寿は、土々呂小学校で、腰を落ち着けて計画的に綴方教育を進めようとしていた。

『僕は、この『光』と『光』の子供のためにあらゆる労力を惜しまなかった。四年計画(学級が替るので)を立て、四年間の間には、子供が自分の力を信ずる、自分の心を信ずる精神を培ひたいばかりに、三年間全力を用ひて来た。十五分の休憩時間すら僕にはなかつた。』

つた。』

木村寿が四年計画を立て、次年度も同じように『光』を出すつもりだったことは、当時『綴方生活』が行ったアンケートに対する回答でも分かる。

『綴方生活』第七巻第四号(昭和十年四月号)

アンケート「プランを聴く」

一、お伺ひ

新年度には綴方経営上、如何なる方面に主力を注がれますか、あなたのプランをきかして下さい。―編集部

二、御回答

宮崎県 木村寿

一年から持上りで、三年迄の経営をしましたが、新学期といつても、この四年生に対しては、次のやうなことを第一にしてやつていかうかと思ひます。

(イ) 子供に一ヶ月の綴方生活のプランを立てさせる 今までは

菅 邦 男

また教師のプランが、子供の生活の中をうよ／＼してゐたのでほんたうの子供の生活としての綴方が練れてゐないやうです。

このプランに対して、子供が渾身の力をつくしていくことに注目していかうと思ひます。

(口)(イ)を中心に、綴方的な指導を実施したいと思つてゐます。

結局は、あくまでも子供の生活の上に、子供の生活を充実させたいといふのを念頭におくのです。

この回答の中で木村は、「一年から持上りで、三年迄の経営をしましたが、新学期といつても、この四年生に対しては」と、「この四年生」といふ言い方をしている。次年度も同じ子どもたちの担任になることをまったく疑つていないのである。

「それが、この三月、僕に『転任』といふ命令を一枚の紙がもたらしてきた。

別れる時、子供が

『先生、もう『光』は出ないですか』

と訊ねた。その時、出ることも出ないと返事の出来なかつた僕だ。子供のこの言葉には生活を中断された子供の不安な前途が横たはつてゐるのだと思つた。僕は、子供が又明日から異なつた師によつて、別な生活勉強の道を辿るのかと思ふと、耐へられない心持になつた。道を発見する迄の重荷を思ふと、奮然たる心が湧かぬでもなかつた。

五十人の子供と、一人の師によつて守り育てられた生活『光』が、一片の紙によつて、何の予告もなしに解散される。教育良心も、教育信頼も、一片の紙に抗議を申出る権利はないのか、権利が付与される時が来るのだらうか。わが教育良心よ、どこに行けばいいのだ、子供の教育信頼心はどこに置けばいいのか。」

この文章から、転勤が、木村寿にとつて唐突なものだつたことが分かる。三年間にわたつて築き上げてきた綴方教育が、突如一片の

転勤命令書によつて断絶させられる、その無念さが述べられている。しかし転勤がまったく予期されていなかったわけではない。「綴方生活」昭和九年八月号の「綴方回顧録」には、「一年生に教へられて」という木村寿の文章が掲載されている。

木村はその中で、「一年生に綴方生活を教へられて已に八年たつた。此の間に僕は二つの学校を経て只今の所に昭和七年に赴任して来た。卒業迄の計画を三度して、二回は二年迄で破れ一回は一年にして破られた。只今四回目の計画をたてて三年目の仕事をしてゐる。卒業まで続ける計画のもとに実行してゐるのだが、過去を考へると随分危いものだと思ふ。」と述べているのである。

したがつて、これまでのことを考えると危ないものだとは思つていたが、二月になつても転勤の話が無いので来年も土々呂小学校に居るものと思つていたところ、三月になつて突然転勤命令が来たということである。

二、頻繁な転勤

1、青木幹勇の証言

この転勤についてであるが、木村寿はこの後に次のようなことを言っている。

「終りに文集奇禍を語つてこの稿をおく。文集奇禍たる、それは文集が僕を転任させたといふ話。

x x 学校に転任した年、新米の事として、一年目はうんと学級に力を入れ、二年目からは学校全体を一丸とするなど考へて、一年目の仕事をはじめた。

相棒の先生は、在職の古さと何でも器用に来るので、学校の宝であるとして自他共に許してゐる人だつた。田舎からとび出して来た僕、若い者はとかく定石がはづれる。八ナに五時間も六時間もとても費してはゐられなかつた。定石と軌道をはづれまいとする人にとつて

は、僕の存在が異様にうつつたに異ひない。文は二学期から二年からと定めてある者には、やつと字の形をおぼえた五六月頃に、文集のまねごとをされてぐらぐらしたにちがひない。『木村先生と同じことをやつてはいけません』『まるで無茶をやつてゐる』と側面攻撃されたものだ。

三学期も終る。新しい希望に燃えて第二段の実践計画をたてた。所が四月転任。『学校の統制を乱すもの』との名称を与へられてゐたとは後にきいた話。一年にして功ならず去るの型。

海ばたに抛り投げられても、亦そこで新しき綴方生活の第一第二第三頁を致々と営みつゝある。』

「x x 学校」は延岡小学校である。木村寿の指導が並でないことはこれまで見てきた通りであるが、それが同僚との確執を生んだというのだ。岡富小学校で同僚だった青木幹勇は、「出る杭は打たれる」ということはをここにもち出すのは当を得ないかもしれませんが、木村さんをめぐる人事には、いつもそんな黒い影がついて回っていたように思われます。」と言っている。青木は当時の木村寿の風貌を、坊主刈り、鉄ブチ眼鏡で、「いつも風呂敷いっぱいに仕事を包んで、やや、神経質にまばたきをしながら、さっさと道を歩くか、ガリ版室にこもって、手刷りの機械を動かしているかで、ぼんやり雑談などをしている木村さんはほとんど見たことがありませんでした。」と描写している。そんな木村には、周囲とは打ち解け難いところがあつたようである。

木村寿は「文集が僕を転任させた」と言っているが、それは延岡小学校でのことで、それ以前の教員歴を見ると、文集だけが原因だったわけではないことが分かる。

* 木村寿の教員歴

大正九年三月二十日

宮崎県師範学校男子第一部卒業

大正九年四月一日 東臼杵郡北川尋常高等小学校訓導
 大正十一年一月十一日 東臼杵郡北郷尋常高等小学校訓導
 大正十二年三月三十一日 東臼杵郡細島尋常高等小学校訓導
 大正十三年三月三十一日 東臼杵郡北川尋常高等小学校訓導
 大正十四年三月三十一日 東臼杵郡南方尋常高等小学校訓導

宮崎師範を卒業して赴任した北川小学校が二年、次の北郷小学校が一年、細島小学校が一年、再度着任した北川小学校が一年という短い在任期間である。木村寿が綴方教育を始めた南方小学校に赴任するまでの五年間に、実に四校を経てゐる。当時は短期間での転勤ということがあつたのかも知れないが、木村の転勤には「黒い影がついて回っていた」という青木幹勇の言葉からすると、意図的な転勤だと言わざるを得ない。木村寿は綴方教育を始める以前から頻繁に転勤させられているのである。具体的に何があつたのかは分からないが、文集だけが転勤の原因だったわけではない。

青木幹勇は更に次のように述べている。
 「ことばは、適当ではありませんが、木村さんは、『一匹狼』だったといえそうに思います。つねにまっしぐらに、わが道を行くというタイプでした。」

こういうタイプの人は、どちらかというと人づきあいが悪いといふのが一般ですが、木村さんにも、そういう一面がありました。

もちろん、酒、煙草はいつさいため、積極的にみんなとスポーツを楽しむといったこともしませんでした。ですから、木村さんの気心、木村さんの教育活動を理解しない人には、あるいは、けがたい、目ざわりな存在だったかもしれません。後にも書くように、当時、日本的な存在だった木村さんが、延岡地方で、それほど深く理解され、評価され、支援されていなかったのは、土地柄もあつたでしょうが、木村さん自身のまいた種によるところもあつたと思います。

その点、木村さんは、孤独であつたかもしれませんが、いやご本人は別にそう思つてはいなかつたかもしれませんが、わたしの目には、かなり肩を張つて、周囲の圧力に抗しているように見えたところもありました。」(以上「わたしの授業」より)

木村寿の「一匹狼」的な性格と周囲の無理解について述べているが、身近なところから見ると、そうした人間関係的な要因がかなりあつたのだろう。

2、佐々井秀緒の見解

佐々井秀緒は、この問題を、また別な観点から見ている。佐々井は当時の綴方教育の状況を「その頃は、文集作りは勤務時間を超過し、用紙代も自弁で、学級文集から学年、学校文集、地域共同文集まで手掛けて息つくひまもなく、その上研究集団誌の編集、印刷、製本、発送が加わり、サークル研究では時に夜を徹して論議の花を咲かせるなど、実にすさまじいまでの活動を展開した。」(『生活綴方生成史』あゆみ出版)と述べている。

木村寿が同様であつたことは言うまでもない。経済面でも、「僕はこの『光』と『光』の子供の為に、出来る限りの経済力を消費することを惜しまなかつた。僕たちのやうに、田舎の漁農村にあつて教育の任にあつてゐるものにとつては、豊かならざる家庭生活が、教育運転を阻止するものが数限りなくある。一学期五銭の紙代ですら「出来る人は」といふ上の詞を置いて徴収せねばならなかつた。この為に僕は買ひたい本も放棄した。」と、控えめながらも文集発行の費用がほぼ自前だつたことを認めている。

こうした「すさまじいまでの活動」は、「上司へのおもねりとか、自己顕示などの功利的目的によるものではなく、ただ子どもたちのために、そして教育本来の使命感からの純粹無償の行為なのであつた。だからこれらの教師たちは当然いづれの方面からも激賞されてよいものなのであつた。」(佐々井秀緒)のだが、現実にはそうはな

らなかつた。

「ところが、実際はこれとは反対に、これらの教師たちが熱心で精進すればするほど逆の結果として、無理解な校長や県当局はこれを白眼視したり危険分子であるかのごとく警戒の眼を光らし、やがては圧迫となり、突発的な左遷や敬遠的な転任などの理不尽がはじまつたのである。このこともまた全国各地で起こつた現象で、思いもかけぬ憂き目に遇つた若い教師が数知れぬほどあつたことは、想像に難くない。」(同前)

木村寿に起こつたことは、単に個人の性格による人間関係の軋轢という次元に止まるものではなく、「全国各地で起こつた現象」だつた。

実は、佐々井秀緒は、その「思いもかけぬ憂き目に遇つた若い教師」の例として木村寿を挙げているのである。

「ここにそれを実証する一例がある。

問題の主人公は、生活綴方教師中、これほどにすぐれた実践家は他に多くは見出せまいとされた九州の木村寿である。

木村は人格円満で謙虚、人間味豊かな人物である。心から子どもたちを愛し、地道に黙々と学級作りに励み、師弟一体の級風をつくり上げることに専念して倦むことがなかつた。地域に即した生活指導が行き渡つたところに彼でなければできない級風が育ち、その中から子ども文や詩が生まれ、それらが文詩集数十冊となつた。全国で作られた文詩集数千冊の中で十指に数えられる優良文詩集の座を占めたことは、当時、誰でもが知つてゐるところである。(略)

そのような木村を指導監督の任にあつた校長も県当局も見抜く力をもたなかつたらしく、思わぬ転任の憂き目を受ける身となつてゐる。」

佐々井は木村寿の仕事を高く評価している。そのような仕事をしただけで木村寿でさえも「あの温厚篤実な人間とも思えない強い怒りと

抗議心をたぎらせている。木村にしてこれなのであるから、他は推して知るべきである。」と言っている。

佐々井の目から見れば、木村寿の転勤問題もそつした時代の流れの中にあつたものだったのである。

佐々井秀緒は、最後に次のように言っている。

「このようにして、実直で真剣な綴方教師たちへの理由なき圧迫は、手近な校長、県当局によって始まったが、まだこの段階では、特高警察はその動きは見せていない。もちろん監視の眼がはずされていないとは思われないが、しかしそれは、いつの日にか一つのカタチとなつて現われる運命をはらんでゐたのだということとは、数年後において実証されたのである。」

数年後、つまり、昭和十五年二月、山形県の生活綴方教師、村山俊太郎が検挙され、いわゆる生活綴方事件が発生する。生活綴方運動弾圧の始まりである。

木村寿はその後昭和十年に門川小へ転勤、十一年に延岡小、十二年に上南方小へ転勤し、昭和十五年に教職を辞している。「教育界が嫌になつた」というのが退職の理由であつた。上南方小学校の「創立百年誌」の職員名簿には、「木村寿 訓導 5、12、3、31、15、8、31」とある。昭和十五年の一学期までの在職であつた。

当時延岡小の訓導であつた中村西平の「延小に生きる」(延小創立百年記念誌)には、特高の取り調べを受けたことが記されている。「日本も遂に第二次世界大戦に突入しました。(略)突然私は学校の応接室で、特高からの訊問を二時間余り受けました。なぜ城山の頂上から、子ども達が手分けして東西南北の鳥瞰図を書くのか。なぜ大瀬橋や亀井橋を実測させるのか。市役所の仕組みや商店街の様子をなぜ調べさせるのか。大空の心とはどんな意味か。ペスタロッチーの様な西洋人の絵をなぜ掲げるのか。」といったことでありま

した。」

青年教師中村西平は、自分自身への励ましと自らに反省を促すつもりで教室の正面に「大空の心」という級標と、ペスタロッチーが子どもと遊んでいる額」を掲げていたのだが、それが特高の目に触れたのである。

中村は更に「後で聞いたところでは、全国一斉に教育関係者の訊問があつて、県北では木村寿先生と二人だけでした。」と言っている。木村寿も特高の調べを受けたのである。中村は「大空の心」とペスタロッチーの絵を外したただですんだが、木村寿はどうだったのだらう。特高による訊問がいつなのか、それが退職と関係があるのか、どういう状況にあつたのか、木村は何も語っていない。

しかし、いずれにしろ特高から目を付けられるような状況にあつたことは疑いない。木村寿自身は門川小学校の文集「乙島」の「あとのことば」で、「夏休みは東京あたりに旅行してきました。(略)東京では宮城をおがみました。宮城をおがんでみると、うれし涙が出ました。明治神宮にもお参りしました。皆も大きくなつて、一べんは東京に行つて宮城をおがみ、明治神宮にお参りして下さい。」と言っているほどだから、中村西平同様思想的に反体制的な立場にあつたわけではない。とすれば、特高の取り調べを受けた原因は、「生活綴方」以外には考えられない。中村西平が「市役所の仕組みや商店街の様子をなぜ調べさせるのか。」と聞かれたというのだから、「調べる綴方」を実践していた木村寿が特高の訊問を受けたとしても不思議ではない。昭和十年の門川小学校への転勤にともなう文集「光」の終焉は、こうした時代の流れの中にあつたのである。

佐々井秀緒の言う「人格円満で謙虚、人間味豊かな人物」という木村寿像は、全国レベルの綴方教育界で存分に力を発揮している木村の姿と言つて良い。だが、周囲の目には、それは写らなかつた。木村が綴方教育に邁進し、土々呂小学校の実践で全国的な存在にな

るにしたがって、ますます周囲と乖離し、溝が深まっていったのである。そのギャップが「光」を解散させ、時代の流れと相俟って、一所でじっくり綴方教育に打ち込むという木村寿の願いをかなえさせなかったたのである。

(二〇〇七年四月二八日受理)